
ホタルトヒカリ

ミナカミツカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホタルトヒカリ

【NZコード】

N4447A

【作者名】

ミナカミツカナ

【あらすじ】

蛍は不思議な力が使えた。その蛍の前に、意味不明でハイテンションな少女　光が現れた！残酷な戦いはないけれど、意味不明な戦いは行われる！はずなんだよね、一応」。

第一話 意味不明！（前書き）

ハハハハハハツ！
ビバ 意味不明！

第一話 意味不明！

ちらり、と光る、螢の光。

螢は、人の命だとも言われている。

少年 水倉螢は、町の一大プロジェクト・「螢を助けよう」という文字が書かれた、看板を見ていた。

これ以外にも、何枚・・・いや、何十枚もの看板があるだろう。

町の小学校が書いた、看板。

町が書いた看板。

団体が書いた看板。

見れば見るほど、飽きてくる。

「つまんねーのっ」

螢は、黄色がかかった少し深めの茶色い髪をしていて、前髪が片方の眼が隠れるほど長い。

髪より、深い色をした眼。

太いとはいえないが、細いともいえない手足。

背は普通。

結構、暗く見られるが、内面・明るい。
だが、そこらの人ほど騒がない。

螢は、不思議な人であった。

螢には、ある力があつた。

それは、死んだ命を集め・自分の力にする力。
しかし、螢はそんなことには使わない。

「命を蚕に変えてこる。」

「なんか、蚕が命を蚕にするって、自分が増える感じだな～」

蚕は、すか、と川のほとりに立った。

ここは、蚕の生息地。

深くは無い、浅い川である。ちらほらと、蚕が光っている。すると、蚕は足を水上に出し、その足に体重をかけた。そして、もう片方の足も、前に出す。

これは、いわゆる、水上歩行ってやつだ。

「ふう～～～・・・・・やつば、自然はいいな～」

とか何とか言いながら、適当に川を進む。すると、一匹の蚕が蚕に近づいてきた。

『「こんばんわ、蚕君。元気かしら?』

蚕が喋った。そして、挨拶をした。

「ああ、光山さん。元気ですよ。どうですか? 蚕は

『しあわせよ。だっていろんな人が来てくれるし、この前は、家の息子たちが、わたしを見つけて、「おかあさんみたい」とて言ってくれたし。ちやんと、蚕になつても判つてくれてたし。なにより、蚕君には感謝しているわ』

「そうですか、よかつたです」

すると、また蚕が近づいてきた。

『よつひ、猫一。』

「あ、電気屋のおじさん」

猫は、オジサンに話しかけられた。

『いいな、ここはー自然が綺麗だし。しつかり、掃除もしてくれるし。見つけると喜んでくれるし』

「やつが、よかったです」

そして、また何匹も集まってきた。

『猫のお兄ちゃんー』の前ね、お母さんたちが来てくれて……

こんな、猫の話を聞きながら、猫は水上歩行を続けていく。そのたびに、指紋が広がっていく。

が、その瞬間。

「危ないよ? こんなところで“力”使っちゃ、ね

聞き覚えの無い声が、上空から降つてきた。

「えつ?」

螢は空を見上げる。

そこには、光のよつに綺麗な黄色の長い髪を左右耳のあたりのまつで結つた髪・綺麗な黄色の眼をした可愛らしい少女がいた。

「ほんわあ。君だよねえー？」

少女は、ゆうくつと、話し始める。

「え？、誰？」

「あたしさ、紫光。キミと一緒に“力”がつかえるよ～ん！」

光と名乗った少女は、螢より少し高い場所（もちろん、空中）で止まり、螢を見ている。

「え・・・・・？つーか何でまだ、空飛んだまま？」

「キリリヤア、いつまで水面に浮かんでる夙っ。ここにいる皆もキリのおかけでしょ？」

「わあ？向ででしょーかつ？」

「うへ・・・・・何で判る？」

螢は少女　　光の言葉に詰まつた。とこりよつ、言ふ返せない。全て見破られてくる。

「あのね、キリヤア。あのねー。」

「何だよ。やつをといえよ」

蛍は、あきれたように言ひづ。

この少女は多分、蛍と同い年だろう。

なのに、全然フインキが違う。

蛍は13歳にしてみれば、落ち着いたほうだろう。

しかし、光は13歳とは思えないほど、幼い。精神年齢は5～8歳だろう。

「キミ、「世界の番人」^{ルイレー・ゼ}のこと知つてる?」

「ルイレー・ゼ?」

突然振られた、意味不明な話題に、蛍の頭が「?」を浮かべた。

「世界の番人」

「意味不明。……………つーか、オマエさつきいたか?」

「えつ?瞬間移動をしましたっ!」

「しました。じゃねーし」

光の普通に言つた言葉に、蛍は少し眉をひそめ、言つた。

「そつ?まあいいや。あのせ、世界の番人はあ、世界のバランスを守る、まあ、いわゆる警官よ。でつ、最近この中の一人……誰だか知らないけど、まあ、誰かが、バランスを崩してゐる。その人は、バランスを保つ中で、一番目に重要な役なの」

「へー。で、一番は？」

蛍は興味がなれどひにまづく。

「キ!!。命を保つ役だから」

「へー。で？」

「あれ？驚かない？なんか、つまんないっ……まあ、その人は、キミを狙つてるの」

「そつか、んじや、バイバイ」

蛍は、この意味不明な人から逃げるため、話題（？）を変え、逃げるために前足を出した。

「うん。バイバイ。氣をつけてね……………じゃないよ。キ!!、もしかしたら、死んじやうかもよ？いいの？」

光は、蛍見たく水面に着かず、その寸前の空中で浮かんだ。蛍は出した前足を引っ込めた。

「……………いこよ。別に

蛍は、唇を少し開いて言つ。

「はあ～キ!!、馬鹿あ？だつてキ!!が死んだら、世界が崩れるから、キ!!の家族まで、死んじやうよ？」

光は、呆れたように首を横に振る。

「あつそ。つーか、いねーし。家族」

「…………そつなんだ。『めんねつ。まあ、どーでもいいけどつー』

どーでもいいなら、言うなよ。

つーか、どーでもいいって酷くねえ？

「ということで、まあ、これからは、今までの仕事と、その人探しをお願いね えっとね、その人の特徴は、藍色の膝まである髪・眼は髪の色と同じ・キミと同じぐらいの背・黒の大きいマントに・ドクロの刺繡入りの黒いタンクトップ・膝までのやつぱし、ドクロの刺繡入りの、半ズボン。ブーツも黒だそうで」

「そこまで知つてんなら、名前ぐらい調べとけよ

「そりだつたね。まあ、いいや。んバイバイ！」

一体、何をしにきたのかと、問いかけてみたくなるような少女であった。

光は、空に急速で上がったと思つと、消えた。

「意味判んねー…………あつ、もう3時じゃん。ヤバイよ。
新聞の人来ちゃうよ」

蛍はせかせかと、水上歩行をやめ、外に出る。

『バイバイ オ兄ちやんつー。』

『あいつがどつね。また来てね』

『じゅーな、螢ー。』

たぐわさんの車に見送られ、螢はその場を去つていった。

ボフッシュ、ヒベッシュにダイブする。

「あ~~~~~」

螢は、『うるさい、と仰向けになる。

天上は、真っ白。螢光灯も付いていない。

「なんだつたんだ? アイツ~」

自分で聞いかけてみたつもりであった。なのに。

「変なヤツだつたんだ、アイツ~」

「せうか、変なヤツか。それなら納得……………
…………じゃねー、何で居るんだ?」

「ひつどーい! せつかく、ぜんぜん仕事の内容わかつてないようだから、来てあげたのに~」

と、光は頬を膨らませ言つ。が、

ズルツツ

「ひあつ！？」

「うわっ！！」

光が、天井に出来た黒い穴から滑り落ちた。
そしてそのまま、螢の真上に落下。

「ぐむおつっ！？」

「わっ！」

螢　重症。光　無傷。
と言つ結果でした。

「せ・・・・・セーフ・・・」

光は、安堵のため息をついた。が、その後すぐに、息切れした声が
した。

「せ・・・・・セーフ・・・じや・・ねえ・・」

螢は見事に息切れを起こした。

光は、くるりと、向きを変え（降りていない）螢の顔を見た。
螢は、青白い顔になっていた。

「大丈夫？」

んなこと心配してゐんだつたら、わざと降りる。
と言つ顔をしている、螢を無視し、光は続ける。

「あのね、たまに戦いで」「うつとうもあるから、慣れておいたほうがいいよ」

慣れたくない。

「でねつ、その戦いつてね……」

光の話は、1時間はかかった。
そして、光は螢から降りた。
もちろん、螢は、生死の一択を選びそうになつた。
ギリギリ、生きれたが。

しかし。

「INの家に、住むことにしましたあつー」

といつ、かなり最悪なプランつきの。

誰か・・・・・・・・・・助けて。

つーか、本来の目的より、コメテイーにこいつるよつな・・・・・・

「ほつたつるー！ テレビ、見ていい？」

呼び捨てだし。

もう、オレが虫になりたい。

そして、コイツから離れたい。

わ

！！

ヘルプ・≡

つ
つ
！
！

第一話 意味不明！（後書き）

うへん・・・・・・。これからはもっとマシなものをつくりたいと思います！

謎の料理ー?（前書き）

なんか、全然ワケわからなくなつた。

謎の料理ー？

わ

ツツー！

そんなことも、気にせず、コメダトレー番組を見る光であった。

「・・・・オマ・・ホントに女か？」

萤は、眼を大きくし、光を見た。

「なによおつ！失礼ね！女よ！証拠でも見せようつかー！」

と言つて、光は服を脱ごうとした。

「いやいやいやいやいやいやつ…違つ、違つ…！」

「ふくつ？」

萤は、顔を真っ赤にしながら、後ろを向き、反論した。

「なんで、オマエは料理がつくれねエんだ！？」

そして、ようやく本題に入つた。

「??/?作つたじやん」

光は、ぶー、と顔を膨らます。

「コレは、食い物か！？」

萤の指差す先、ソコには、ハエが飛んでいる・真っ黒・形がわからなくなつた、（光が言つには、「アツブルパイ」）謎の「ミミ」があつた。

「ミミ！…失礼ね…じゃあ、食べてみなさいつー！」

光は、テーブルから立ち上がつた。

「いやだー！…オマエが食え…！」

「いやつー…まずいもん…！」

「まずいんじや あないか…！」

「氣のせいだよ…！」

「はい！」

「ノーブル！」

突如、光の言葉がさえぎられた。

卷之三

「ふぬ」
「ふぬ」
「ふぬ」
「！」

顔を尋ねられ、必死に抵抗した。

「だが、螢の力によつて、ソレは無効化になつた。

「？」

蛍は、光の顔をのぞいてみた。
その瞬間。

「ふせねー！」？

「いええーい キミも食べてよね あたしは、食べたんだから~」

光が、にやつ、と笑いながら萤の顔に、「謎」を突きつける。

しかし、光の

しかし、光の力は弱く、すぐに押し戻されてしまつた。

堂は「よくは放されたといふ　あの　『説』を書き上げられたので
すぐさま、トイレに向かつた。

「？おつかしーなー？材料間違えたかな？」

粘土！？まあ色が似てるからしょうがないね　・・・ 焼き加減、千度じゃあなかつたの！？・・・・・ 清潔な器具？あー・・外用のおもちゃじゃあだめだつたか・・・・・

やしほ、御世、トヤノドベツたり。・・・。

「お前がやつを殺すんだよ。」

卷之三

蛍の鼻が動いた。

不審に思つて、キッチンに行くと・・・。

ソコには、Hプロン姿の光がおいしそうな、パイを持っていた。
「あー、やつとでてきたあー！今、焼けたよー！」

光はパイを蛍の場所まで持つてきた。確かに、いい焼き加減であつたし、い

ためしに恐る恐る、パイに手を伸ばし、パイを口に入れる。

「！」

「食える！ 食えたよ！ 死ななかつたよーー！」

「ちょっと失礼なトコもあつたけど、ソレはよかつた！」

そして、席について、ゆっくり食べる。

「あつ、さつきは！」めんね。間違えて、リンゴ パプリカ・砂糖
塩・パイ生地 粘土・焼き加減 千度・器具 外のおもちゃでや
つたから、まずくなっちゃった！」

「ブ
！――」

董は、飲んでいたお茶を思いっきり噴出した。

「あつ、汚い！董――！」
「ななななななな・・なんてモン食わすんだ――！」
董は、わなわなと震えだした。
「大丈夫！コレはしつかりやつたから――」
「あ
・・」

董の運命尽きたなり！

はっぴーえんど

謎の料理ー?（後書き）

本来、ファンタジーだったよつの気がするんですけど・・・、コメ
ティー? 次回からは・・・? マア・・・いいや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4447a/>

ホタルトヒカリ

2010年10月9日21時40分発行